

オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

ズミ

オプション教材ズミ 読解マラソン集

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

3.

5.

2.

4.

文章を読む営みは、単に文字が伝える内容を、記憶の中へ転写するというものではない。いわゆる速読とか、斜め読みの場合はともかく、この文章は何を意味しているのか、前後の脈絡はどうなっているのか、といったことを確かめながら読み進めないかぎり、一つにまとまった文章を理解することは難しい。こうした思考作業は、もちろん映画や音楽や漫画に接するときにも起こりうるものではあるが、文字という媒体そのものが、極めて抽象化された記号であるがゆえに、みずから頭を働かせなくてはいけない部分が膨大に生じる。これまで読書が「教養」の中核とされてきた大きな理由は、そうした思考訓練の場をもたらし働きにもあつたのだろう。

また、山崎正和が説くように、「身につかない単なる知識の記憶は教養ではないが、逆に知識の裏付けのない人格の陶冶は修養と呼んでも、教養とはいわない」。書物を通じて得た知識がほんとうにその人の発想や態度にしみこんでいないかぎり、「教養ある人」とは呼ばれないのも確かであるが、反面で、外から取り入れる知識は次元の低いものだとして人柄のみに執着する態度も、「教養」の敵とされてきた。

立派な見識や、豊かな情感を人が抱いたとしても、頭を働かせてそれを腑分けし、適切な言葉で表現できなければ、他人に伝えられない。書物を読み、知識を蓄える営みは、著者のそうした思考作業を追体験し、さまざまな発想に触れることで、自分の側の思考の道具立てを豊かにする、重要な意味を持っている。

このことは、もやもやした思考内容を整理し、順序だった形に整える、言語の機能と関連する。もちろん、漫画や映画などの「サブカルチャー」もまた、そうした回路として働くことは確かであり、「教養」の一環として、それを組み入れることも大事であろう。だが、日常言語の次元でなら、とりあえず誰でも理解し、それをみずからの表現手段として使いこなせる言語の場合とは異なっており、映画や漫画やゲームを、みなが思い通りに作成できるわけではない。たとえコンピュータのソフト開発が進んで、今よりずっと容易になったとしても、言葉と同じ次元にまで降りてくることは難しいだろう。

う。そもそも、言語を通じて、思考がすでに秩序づけられていなければ、ある特定の作品を「萌え」の対象に選ぶことも、その優劣について語ることもできないはずである。

さらに、一つの書物が他の膨大な書物と関連してゆく、知識の体系もまた、少なくとも二十世紀までは、知の主流をなしてきた。そうした文化の蓄積は、今後、新たな知を作り出してゆく営みにも重要な基盤であるし、それに接し、十分に理解するには、まだ書物が主な回路であり続けるだろう。もちろん、ここでいう「書物」も、必ずしも書籍の形をとらず、かなりの部分が電子空間に保存されるデータに代わってゆくだろうが、紙面であれパソコンの画面であれ、その上で線状に書き連ねられた文字言語を読みとるという作業は、変わらない。「サブカルチャー」や映像文化・音声文化に関わる知が、今後ますます大事になるとしても、それはやはり、書物を通じての「教養」を何らかの形で積んだ上でなければ、成り立たないものであろう。

（荻部直『移りゆく「教養」』による）



文学作品や評論のようなものを読んで、文章が読める、というのは、いわば、錯覚である。科学、技術などの文章はほとんど読んだことがないから、詩を読むようなつもりで、マニュアルを読むという誤りをおかして平気でいられる。マニュアルを読むには、小説を読むのと違った頭のはたらきが必要である。それをことばの専門家でもご存じないらしいことを暴露したのが、さきの評議員会の雑談である。学者、評論家といわれる人たちのことばの教養を疑わしめる、情けないエピソードである。

未知のこと、ほぼ完全に未経験なことからをのべた文章というもの、読み手にとって暗号のようなものである。ざっと一読してわかるように考えたら大違いである。想像力をはたらかせ、筋道を見つけ、意味を判断するという高度の知的作業が求められる。昔の人は、そういうとき「読書百遍、意おのずからあらわる」と言ったが、百遍くりかえしてもわからないものはわからないということがすくなくない。ましてや、自分の教養、知識をハナにかけて、読んでわからないと、文章が悪いからだと言うのは、思ひ上がりである。

知らないことを文章で知るのには、マニュアルに限らず、つねに困難である。早い話が、知らない人に、自宅までの道順を、うまく文章で伝えられる人は相当なことばの達人である。ことばで説明してあつても、訪ねてくる人は道に迷う。この場合、教える側の言い方がわるいということもあるが、それを読む人の勘も悪いのである。

(中略)

戦後、アメリカにならって、所得税が自己申告になった。毎年、三月十五日までに、年間の所得の確定申告をしなければならぬ。この書き方が難しい。書き方の「手引き」がわかりにくい、と文筆家や大学教授たちが非をなした。税金をとられるのがおもしろくないところへもつてきて、申告書の書き方がわからない。手引きの説明もわからない。それが読めないと白状するのは知識人のプライドが許さない。口々に税務署の手引きが不親切だと騒ぎ立てた。

実際、税務署の手引きがあまり上等でなかったらしく、方々で槍玉にあがって、苦心したのであろう。だんだん改善され、数年たつと手引きに対する悪評は聞かれなくなった。もちろん表現がよくなったこともあるが、納税者がそういう文章の読み方に馴れたということが大きかったと想像される。

もともと、わかり切ったことなど、読んでも役に立たない。わかっているものを読んでおもしろいのは別の頭のはたらきである。未知のものを読んでわかつてこそ、はじめて、ものを読む甲斐があるというものであるが、本当は、わからないことを書いてある文章を読んで、わかるというのは大変困難で、わかれば幸運といったくらいのものである。そういうことを一度も考えずに、自分はものが読めるように考えるのは誤っているが、それに気づかない。

われわれは、すこし間違つた、あるいは、おくれた読み方を身につけてしまっているのかもしれない。真に文章、ことばを読むということは、どういうことか。どうすれば、そういう読み方ができるようになるか。われわれは、一度も真剣に考えたことがない。一度もいわゆる読書ということに疑問をいだかない教育をうけて、知識人、ホモサピエンスのように考えているとしたら、すこし滑稽ではないか。

(外山滋比古『読みの整理学』による)



所詮は卵や雛の段階でしかない未熟な才能を過信し、それに頼り過ぎることであつて、自滅の道を辿つてしまつた小説家や詩人は枚挙にいとまがない。ために、それが芸術家の王道であり、それが本物の証であるとする誤つた固定観念が広まり、また、そうした安易な生きざまの周辺に漂う甘さに共鳴する風潮が幅を利かせて、わが国の救いがたい、進化とも、深化とも一切無縁な「文学の青枯れ病」を招くに至つたのである。

かく言う私の場合だが、小説家のレッテルを貼られた二十三歳の時点で、自分の才能がせいぜい卵の段階でしかないという認識をきちんと持つていた。磨いて育てないことにはたちまち行き詰まつてしまふだろうという確信を抱いていた。そう受け止めることができたのは、当時、大御所と呼ばれている既成の書き手たちの才能が飛べる鳥の域にまで達していたからではない。むしろその逆で、文学愛好家と関係者たちが飛べない鳥を眺めて満足しているのかと思うと、ひどく失望したことを未だに生々しく記憶している。

ペンを握つたときから、翼を育てなければ飛べない世界が無尽蔵に存在することに気づいていた。それこそが文学の世界に違いない、本物の魅力を秘めた高みを滑空してみたいという一心から、何十年費やしても、いつの日かきつと飛んでやると意を決し、挑みつづけてきた。少しずつではあつても確実に力がつき、以前なら絶対に不可能だつた世界に手が届くようになってゆく喜びは何物にも代えがたく、その醍醐味と達成感に酔い痴れることが書く動機として固まつていつた。

四十代後半に狙いをつけた長編小説があつた。テーマも構想も充分だつたが、取えて書かなかつた。なぜなら、その大空を飛翔するだけの翼の力が具わつていないという自覚があつたからだ。つまり、当時の文章力では歯が立たない超大物だつたのだ。それほど手ごわい相手には、とてつもない表現力が必要不可欠であるということをよくよく承知していた。

それは、絢爛たる言葉によつて紡がれた時代絵巻の世界だつた。日本が最も日本らしく、底抜けに自由で、生き生きとしていた室町時代を背景に、かの有名な「日月山水図」の屏風絵と、それを描いた作者が不詳であることを想像の起爆剤に用い、極めて大胆な発想によつて、小説の原点とも言ふべきめくるめく物語を構築し、かつてどの書き手も為し得なかつた形式と、漢語と大和言葉との融和を図る文体を存分に駆使しなくてはならない、新境地だつた。六十代に入つてまもなく、今ならそれが書けるといふ自信を得た。

心のひだを丹念に描いてゆく、ちまちま、こせこせした小説も、それはそれでわるくはないのだが、そうした作品の対極に位置するぶつ飛んだ小説を、原始的で、呪術的で、異常なまでの吸引力を秘め、それでいながらどこまでも格調の高い大叙事詩のごとき長編小説を無性に書きたくなつた。膨大な資料を読みあさり始めたのが二年ほど前だつた。そして、昨年の暮れに千三百枚を脱稿した。

最後の一行を書き終えたとき、信じてつづけてきた小説家としての基本姿勢に間違いがないことが静かな興奮となつて襲つてきた。あれくらいの長い年月を費やさなければ、これくらいの作品は書けないのだということ、また、この喜びを味わうための四十数年の助走であつたということが実感された。

だが、その喜びも束の間だつた。今はもう新たな大空を目指して、没頭と継続の日々を送っている。飛んでも飛んでも尽きることのない文学の天空は、もしかするとこの宇宙より広いかもしれないと、そう思いながら。

(丸山健二「尽きない文学の天空」による)



子供の頃、習字の練習は半紙という紙の上で行った。黒い墨で白い半紙の上に未成熟な文字を果てしなく発露し続ける、その反復が文字を書くトレーニングであった。取り返しのつかないつたない結末を紙の上に顕し続ける呵責の念が上達のエネルギーとなる。練習用の半紙といえども、白い紙である。そこに自分のつたない行為の痕跡を残し続けていく。紙がもつたないというよりも、白い紙に消し去れない過失を累積していく様を把握し続けることが、おのずと推敲という美意識を加速させるのである。この、推敲という意識をいざなう推進力のようなものが、紙を中心としたひとつの文化を作り上げてきたのではないかと思うのである。もしも、無限の過失をなんの代償もなく受け入れ続けてくれるメディアがあつたとしたならば、推すか敲くかを逡巡する心理は生まれてこないかもしれない。

現代はインターネットという新たな思考経路が生まれた。ネットというメディアは一見、個人のつぶやきの集積のようにも見える。しかし、ネットの本質はむしろ、不完全を前提にした個の集積の向こう側に、皆が共有できる総合知のようなものに手を伸ばすことのように思われる。つまりネットを介してひとりひとりが考えるところという発想を超えて、世界の人々が同時に考えるというような状況が生まれつつある。かつては、百科事典のような厳密さの問われる情報の体系を編むにも、個々のパートは専門家としての個の書き手がこれを担ってきた。しかし現在では、あらゆる人々が加筆訂正できる百科事典のようなものがネットの中を動いている。間違いやいたずら、思い違いや表現の的的確さは、世界中の人々の眼に常にさらされている。印刷物を間違いなく世に送り出す時の意識とは異なるプレッシャー、良識も悪意も、嘲笑も尊敬も、揶揄も批評も一緒にした興味と関心が生み出す知の圧力によって、情報はある意味で無限に更新を繰り返しているのだ。無数の人々の眼にさらされ続ける情報は、変化する現実に限りにくく接近し、寄り添い続けるだろう。断定しない言説に真偽がつけられないように、その情報はあら

ゆる評価を回避しながら、文体を持たないニュートラルな言葉で知の平均値を示し続けるのである。明らかに、推敲がもたらす質とは異なる、新たな知の基準がここに生まれようとしている。

しかしながら、無限の更新を続ける情報には「清書」や「仕上がる」というような価値観や美意識が存在しない。無限に更新され続ける巨大な情報のうねりが、知の圧力として情報にプレッシャーを与え続けている状況では、情報は常に途上であり終わりが無い。

一方、紙の上に乗るといことは、黒いインクなり墨なりを付着させるという、後戻りできない状況へ乗り出し、完結した情報を成就させる仕上げへの跳躍を意味する。白い紙の上に決然と明確な表現を屹立させること。不可逆性を伴うがゆえに、達成には感動が生まれる。またそこには切り口の鮮やかさが発現する。その営みは、書や絵画、詩歌、音楽演奏、舞踊、武道のようなものに顕著に現れている。手の誤り、身体の不れ、鍛錬の未熟さを超克し、失敗への危険に臆することなく潔く発せられる表現の強さが、感動の根源となり、諸芸術の感覚を鍛える暗黙の基礎となってきた。音楽や舞踊における「本番」という時間は、真っ白な紙と同様の意味をなす。

（原研哉『白』による）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

個人主義的な功利主義傾向にもとづいて「自分探し」がおこなわれるとき、「他者」がいかなる位置を占めるかを考えてみよう。各人が各人の「自分」を探し求めるとき、社会的空間はすべての「自分」実現を保証するように構成されていないから、「自分」の獲得をめぐって必然的に客観的競争状態（受験競争など）が生じ、結果として社会関係が解体するということもたしかに重要である。しかし、それと並んでアイデンティティを問題に据える観点から重要なものは、獲得され実現されようとしている「自分」にとつて、他者はその実現を承認するだけの道具的存在とみなされているのではないかという点である。本来的に人間は社会的動物であり、その社会性とは「他者」との相互的認知・承認関係に他ならないとすれば、その関係は、錯綜する「自分探し」と表裏するかたちで互いに道具主義的な「他者」探しとなつていくのではないかということである。とすれば、「自分」がどこに探し当てられたかとして、その「自分」とはどのようなもので、どこに在るのであるか。道具的存在でない「他者」といかにして出会ったであろうか。「他者」は道具的存在とすることに勝利して「生き残った」「自分」は、やはりそのようにして生き残った他の「自分」たちとどのような関係に入るのだろうか。そこでも、相手からの承認を求める道具主義的な関係——承認の争奪関係——に入るのではないだろうか。そしてその絶えざる運動のなかで人格的存在としての「他者」が失われるとき、「自分」もまた非功利主義的な人格を喪失していくのではあるまいか。かくして、排他的な道具主義的「自分探し」は、その「自分」と非道具的・人格的に関係することのできる「他者」の喪失過程であり、同時に人格としての「自分」を喪失する過程なのではないか。ひっくり返る言え、人間同士の非道具的な人格的関係を喪失する過程なのではないかということである。では、なぜこうした帰結が生じるのか。それはやはり、そのような「自分探し」が原理的に近代社会のものだからである。つまりそれは、人を「自分探し」に追いやる社会的状況を作り出している主要な社会的原理と同じロジックでおこなわれているからである。たとえば、「自分探し」において参照されている書籍群の主たる

執筆者を思い起こせばよい。心理学を代表として、多くはいわゆる「こころ」を研究対象とする学問分野のひとつである。近代心理学や近代精神医学とは、まさに近代科学であり、したがって近代社会の一部を成しているのではあるまいか。私たちは、「自分」であることをつづいては私たちに可能としない近代社会のなかで、近代的手法によって「自分」を求めているのではないか。これを皮肉といわずして何といおう。「自分探し」はいまや二重の皮肉のなかにあるわけだ。問いを先に進めよう。ではなぜ人は功利主義的な「自分探し」に突き進んでしまうのか。それを個人の自由と片付けたのでは、社会的認識は生まれてこない。アイデンティティの個人主義的獲得という発想、功利主義的「自分探し」の動きがどこから生まれてくるのか。答えはじつは簡単である。先に触れたように、「自分」を獲得することとを阻害する社会的な要因や環境に置かれているために、人間という存在にとつて不可欠の「自分」を形成することが原理的に困難だからである。個性重視という社会的な美辞麗句と、「自分」獲得のための社会・文化的基盤が欠落しているという状況との矛盾に引き裂かれて、個人主義的で功利主義的な「自分探し」という手法を採用せざるを得ないからである。

（景井充「アイデンティティの行方」による）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「自身の創造性や潜在能力を信じる」というのはたやすい。ところがまさに、この「潜在能力イデオロギー」が、私たちの生を苦しめてもいる。格差社会のなかで、私たちはこのイデオロギーに押しつぶされそうになることがある。

ここ数年、日本では格差社会論が大きなテーマとなっている。いや格差社会論は、時代の流行言説となったといえるだろう。しかし実際のところ、日本の経済格差が急激に広がっているのかといえば、そうともいえない。大竹文雄の分析によると、所得格差の拡大は、一九八〇年代からの傾向であって、近年になって急激に拡大しているわけではない。また、最近の格差拡大の主な原因は、人口の高齢化によるものであって、三十代から五十代の世帯主の所得不平等度は、ほとんど変化していないという。

(中略)

私たちは、低所得の人々に対して、救いの手を差し伸べるべきだという。低所得の人々は、教育や職業訓練の機会を奪われているのだから、さまざまな政策を通じて、希望の道を与えるべきだという。あるいは私たちは、反対に、低所得の人々を道徳的に非難することがある。低所得の人々は、総じて人生に対する意欲が低く、やる気がないからダメなのだ(自業自得)と非難することがある。低所得層をめぐるこうした同情／非情の両論には、しかし、一つの共有前提があるだろう。すなわち、現代社会においては「意欲をもって潜在能力を開花させること」が「よいこと」であって、ところが低所得の状態では「希望」や「意欲」を失ってしまう、という認識だ。

格差を批判する人も肯定する人も、あるいは、格差社会の「負け組」を哀れむ人もそうでない人も、論者たちは総じて、潜在能力を実現することが大切とみなしている。そしてこの潜在能力イデオロギーの観点から、勝者と敗者の格差を問題にしている。格差社会論の本質は、実体としての経済格差よりも、むしろ「潜在能力イデオロギー」を投影することから生じているのではないか。つまり、「勝ち組」は自己実現しているからすばらしいが、「負け組」は潜在能力を開花させていないからかわいそう、というわけである。

けれども、こうした潜在能力イデオロギーの「投影」の仕方は、どこか間違っていないだろうか。はたして、経済的に成功した人たちは、本当に潜在能力を開花させることに成功しているのだろうか。成功者といわれている人たちの多くは、むしろ職場では自分の可能性を試すことがあまりなく、長い残業労働に苦しめられているのが実状ではないだろうか。

また反対に、低所得の人々は、本当に潜在能力を開花させていないのだろうか。むしろ、「ナンバーワンよりオンリーワン」を目指しつつ、自分なりの潜在能力を開花させている人も多いのではないだろうか。低所得層の人々が総じて潜在能力を実現していないというのは、私たちの偏見であるだろう。にもかかわらず、多くの人々は、「低所得層ほど自己実現していない」という錯覚を抱いている。そのよい例は、「ニート批判」である。

「ニート」とは、年齢十五歳から三十四歳で、仕事も通学も家事もしていない者を指しているが、その数は二〇〇二年以降、しだいに減少してきた。にもかかわらず、人々は、ニート批判に強い関心を示している。その理由はおそらく、人々は「潜在能力イデオロギー」の観点から、意欲のない者や自身の潜在能力を試さない者を、以前にも増してはげしく軽蔑するようになったからであろう。ニート批判は、自らの潜在能力を開花させずにストレスを抱えている人たちが、自分よりもっと潜在能力を開花させていない人を非難するという、いじめの構造から生じているように思われる。

(橋本努『自由に生きるとはどういうことか』による)



メリトクラシーを社会の編成原理のひとつに置く近代社会において、不平等の生成と正当化は、学校にゆだねられた重要な役割である。教育を通じて測定される「業績（メリット）」をもとに、人びとを社会経済的地位に配置する。先進産業社会ではどこでも、教育を通じてメリトクラシーが、社会的不平等の生成と正当化に大きくかわっている。

ところが、教育を通じたメリトクラシーといっても、その具体的なプロセスには、社会によって大きな違いがある。たとえば、イギリスやフランスでは、教育の場で業績を測定する際に、論述式の試験や口述試験が重視されている。このような場合、正しい語法やアクセント、レトリックの使い方といった、主に言語表現にかかわる出身階層の文化が、業績評価のプロセスに入り込む。出身階層の文化と試験で測られる文化との距たりが小さいのである。その結果、学校での成功のチャンスは、どのような階層文化を身に付けたか——いいかえれば、どのような家庭に生まれたのか——によって左右されることになる。

フランスやイギリスにおいて、あるいは人種間の問題として見た場合のアメリカなどで、「文化的再生産」の議論が盛んに行なわれるのも、階層文化を媒介とした不平等の生成が、可視的でありアリティをもつからだ。学校は、どの階層の子どもたちに対しても、公平な扱いをしている。どの子どもにも、学校で成功するうえで、同じ条件が与えられているはずだ——そうした信念への疑義の提出。「文化」の顕在性ゆえに、これらの社会では、学校を通じた不平等の再生産が、その過程で不覚にも綻びをみせてしまうのである。

それに対し、日本の学校は、そのような綻びをほとんど外に見せることなく、見事に不平等の再生産を果たしてきた。日本でも、家庭で伝達される文化資本が、学校での成功を左右していることはたしかである。文字や数字などの記号を操る能力、丹念に論理を追う能力、ものごとをとらえるうえで具体から抽象へと飛躍する能力。これらの能力の獲得において、どのような家庭のどのような文化的環境のもとで育つのが、子どもたちの間に差異をつくりだしていることは否定しがたい。そして、こうした能力の違いが学校での成功と失敗を左右するであろうことも容易に想像できる。それ

でも、日本の場合には、学校で測られる学力は、特定の階層の文化から「中立的」であると見なされている。しかも、生得的な能力の差異をなるべく否定し、「子どもにはだれでも無限の能力、無限の可能性がある」と見る能力平等観が広まっている。そして成育環境の違いと成績との関係をむすびつけて見ること自体にも、子どもに差別感を与えるのではないかと慎重な態度がとられるのである。がんばればだれでも「一〇〇点」がとれるとする努力主義信仰も根強い。日本でも「客観的」に見れば、子どもの出身家庭と成績との間に相関関係を見いだせるのだが、そうした事実自体を、教育実践の前提とはしない傾向が強いのだ。それゆえ、大衆教育社会が完成の域に達した以降は、特定の階層や集団にとつて日本の教育システムが有利にはたっているという見方それ自体が、多くの人びとにとってはあまりピンとこない現実となっている。それほどまでに教育を通じた社会の大衆化が進展したのだ。実際には学校を通じて不平等の再生産が行なわれているといえるのである。

（荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ』による。一部改変）



徳川家康自身は、戦国武将の常として、漢詩文の読み書きはできなかった。しかし彼は、「漢文の力」をよく理解していた。

家康が「漢文の力」を実感した最初の契機は、一五七二年の三方ヶ原の合戦であった。若き日の家康は、「孫子の兵法」に精通した武田信玄と交戦し、生涯最大の大敗を喫した。武田家の滅亡後、家康は武田家の遺臣を多く召し抱え、信玄の兵法や軍略を研究させた。

(中略)

日本史上、「漢文の力」を活用して日本人の思想改造に成功した統治者は、聖徳太子と徳川家康の二人であった。

江戸時代は、王朝時代に次ぐ日本漢文の二番目の黄金時代であった。江戸期の漢文文化の特徴としては、

(一) 漢文訓読の技術が、一般に公開されたこと

(二) 史上空前の、漢籍の出版ブームが起きたこと

(三) 武士と百姓町人の上層部である中流実務階級が、漢文を学んだこと

(四) 俳句や小説、落語、演劇などの文化にも、漢文が大きな影響を与えたこと

(五) 漢文が「生産財としての教養」となったこと

室町時代まで、漢文訓読の方法、例えば訓点の打ちかたは、平安時代以来の学者の家の秘伝とされていた。訓点が一般に公開され、われわれが見慣れている「レ点」「一二点」「送り仮名」などの訓点を施した漢籍が広く出版されるようになったのは、江戸時代からであった。

(中略)

日本に來た朝鮮通信使は、日本側の文人と漢詩の応酬をした。これは国威をかけた文の戦いでもあった。初期のころは、日本側が作る漢詩のレベルは低かった。あとになると日本側の漢詩のレベルが急速に向上したため、朝鮮側も一流の漢詩人を選んで日本に送るようになった。

例えば、新井白石は、幕府に仕える漢学者として、朝鮮通信使

と礼をめぐって激しい論争をかわした。朝鮮側は、論争は別として、白石の漢詩を高く評価した。白石のほうも、自分の漢詩集の序文を朝鮮通信使に書いてもらうなど、彼らの文学的能力に対して深い敬意を払った。政治では対立しても、文化では友好をつらぬく、という態度が、日朝双方に見られたことは、興味深い。

戦国時代まで野蛮だった武士は、江戸時代の漢文ブームによって、朝鮮や中国の士大夫階級とわたりあえる文化的教養人になった。

日本に渡ってきた朝鮮通信使は、華夷思想の立場から、日本固有の文化や風俗を低く見る傾向があった。そんな彼らさえ、日本の出版業の盛んなこと、とくに漢籍の出版物の豊富さと値段の安さには、驚きの目を見張った。

(中略)

江戸末期には、下級武士のみならず、ヤクザの親分や農民までもが漢文を学んだ。当時の漢字文化圏のなかで、このような中流実務階級が育っていたのは、日本だけである。日本がいちはやく近代化に成功できた理由も、ここにあった。

中国でも、医者だった孫文のような中級実務階級は存在したが、彼らの力は士大夫階級より弱く、そのため中国の辛亥革命(一九一

一)は日本の明治維新より半世紀も遅れた。もし、初代將軍・徳川家康が儒学を幕府の官学にするという構想をもたなかったら。もし、日本に漢文訓読というユニークな文化がなかったとしたら――。

日本の近代化は、もつと困難な道をたどっていたに違いない。

(加藤徹氏の文章に基づく)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

文化がたんなる習慣と異なる点は、常に一種の価値意識を含んでいることです。それゆえに、たんなる習慣には高いも低いもありませんが、文化には高い低いという質的な違いが生まれてくる。背後に文明という価値基準があり、それがいかに個人の身についているかが文化だからなのです。

わかりやすい例を一つ挙げましょう。ピアノや楽譜というものは西洋で生まれたものですが、まさにこれは文明の典型例です。楽譜は頭のなかの秩序であり、ピアノは頭のなかの技術を物質化したもので、したがって急速に世界に広がりました。

しかし、社会のなかにピアノがある、楽譜があるということと、個人にとってピアノが弾けるということはまったく異なる現象でしょう。

ピアノが弾けるとはどういうことか。たんにマニュアルに従い、順を追って鍵盤を押すということではありません。キーの前に座つたら、もう指が動いてしまつていくという状態になつたとき、つまり身についた行動になつたとき、真の意味でピアノが弾けるといえます。当然ながら、この行動には価値の上下があつて、上手な人もあれば、下手な人もあるわけです。

こうした現象は、生産技術の分野、たとえば工業の分野にも起こりうることです。二十世紀になつて近代工業は世界中に普及していきました。それは近代工業が文明であり、頭の産物だつたからにほかなりません。しかし、しばしば指摘されるように、技術伝播がスムーズにいかない場合もあります。機械文明を受け入れた側の人びとがうまくなじめず、技術が文化として身につかないことも少なくない。この技術を身につける文化的な部分を、われわれは俗に「ノウハウ」と呼んでいるわけです。

文明の教育と文化の教育はいささか異なります。文明の教育が世界の果てまで容易に広がっていくのたいして、文化の教育は人間の身体能力に結びついていて、容易に平面的には広がらないのです。

ピアノの弾ける人が集団的に増え、その集団が面をなして広がっていくことは考えられないでしょう。ただ、その代わりというべきか、文化は文明地図の距離を超えて突然に、一人の身体から他の人

の身体へと伝わる場合があります。近年、中国や韓国から優れたピアノリストが輩出していますが、彼らの育つた環境はピアノにとっては異文明の世界でした。しかし、そうした環境にあつても、一人の個人が懸命に練習することで、文化としてのピアノを身につけることができたのです。

行動がまるで技術のように規範に従いながら、しかも文化として身につくという営みは、日常生活の一部にも現れます。一般にこれは「作法」と呼ばれますが、そのもつともいい例が日本の「茶の湯」でしょう。

湯を沸かし茶を点てて飲む。このごく日常的な行為が、茶の湯ではまずいったん手順に分解されて定式化されます。帛紗を捌き、茶碗を試うといった、すべての動作が作法として図式化される。しかし、茶の世界でよくいわれることですが、手順が人の目に見えるようではまだ上達したとはいえない。水の流れのように、自然に見えるまで練習を重ねなければならぬ。いいかえれば、第二の習慣となつたときに、上手な茶の湯、つまり文化としての茶の湯が成り立つのです。

したがって、文化の教育は非常に難しいともいえるし、しかし一人一人の個人が自分の責任と努力によつて習得できる不思議なものだともいえます。

(山崎正和『文明としての教育』)



「民主的人間」は、身の周りの他者を自分の同類とみなす。「民主的人間」にとつて、他者とは、自分と同じように、喜び、悲しみ、生き、そして死ぬ存在である。アダム・スミス（イギリスの経済学者）は「共感」概念によつて、新たな道徳原理を打ち立てようとしたが、トクヴィル（フランスの思想家）に言わせれば、人が他者の感情や思考に共感するのも、他者を自分と同類とみなす想像力があつてこそその話である。他者の喜びや痛みにも共感するには、そもそもその前提として、その他者が自分と同じように喜んだり、悲しんだりする存在であるという認識がなければならぬ。そして、そのような認識が当然のものとなつたとき、はじめて「人類」という理念も生じる。人類とは、自分と、自分と同じように感じ考える同類の集合体として観念されるものにほかならないからである。

（中略）

これらのことがすべて正反對なのが、「アリストクラシー」の社会である。不平等こそを社会原理とする「アリストクラシー」の社会において、人を序列化するヒエラルキーの存在は自明視され、人は自分が社会のヒエラルキーのどこに位置するかということから、自己を認識する。このような社会において自然なのはヒエラルキーであり、身分制である。ヒエラルキーや身分制の存在は、過去から当然に存在してきたものであり、誰かが何らかの意図に基づいて作り出したものとは見なされない。人は自分の身分と自然に一体化し、自分が所属する集団の他のメンバーと密接に結びつく。そのような社会において、人は他者との紐帯を疑うことはない。

このような社会において、ルールや規範は自分たちで決めるものではなく、自分たちの力の及ばない外部からもたらされる。価値の源泉は、自分たちを越えたところにあり、自分たちはそれを受け入れ、従うしかない。ヒエラルキーの存在もまた、そのような価値の源泉によつて正当化される。人々はそれを正当であると考えて疑わないため、服従には卑屈さはない。むしろ、それに従うことに喜びを見いだすこともありうる。

もう一つ、「アリストクラシー」の社会においては、人と人との差違つてゐることが当然であり、人々を隔てる身分の壁が自明視されるが、その意味で人間間の差異は自然なものである。このような社会においては、人と人とを区別する差異は、あまりに当然な存在であつて、なんら特別の価値を持つものとは見なされない。ところが、人と人との相互を同類とみなす「デモクラシー」の社会において

ては、むしろ逆説的に、人と人との差異やその個性がそれ自体として価値と見なされるようになる。「デモクラシー」の社会において、人は相互の平等性を前提に、自分の個性、独自性、差異を強調するようになり、これを他者に承認してもらいたいと願うようになる。しかしながら、「デモクラシー」の社会において個性が価値となるのも、あくまで原則としての平等があつてこそその話である。ある意味で、「デモクラシー」の社会における個性の追求は、平等の枠内において、平等が許容するかたちで差異を取り戻そうとする試みとしても理解できるだろう。

（宇野重規『トクヴィル不平等の理論家』より。文章を一部改変した）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

日本の論壇で、「個性」の行きすぎということが「戦後民主主義」とからめて批判的に議論されたときがあった。私は、そのような論者に基本的にうさんくさいものを感じて、同調するところか、まともに取り合う気にすらならなかった。

民主主義が、否定されるべきものとして議論に出てくること自体、何を言いたいのかわからない。「戦後」という限定詞を付けたからといって、なぜそれがネガティブなニュアンスになるのか？

「戦後民主主義」の中で「個性」や「権利」の行きすぎを論ずる論客に至っては、最低限の論理的整合性すらないように思われた。

「個性」が輝いたり、「権利」が認められたほうが、よいに決まっている。「個性」や「権利」といった、人類が長い歴史の中で勝ちとってきた価値を否定的に議論している論客は、自分の論文が凡百の雑

文と同等に扱われたり、財産が恣意的に没収されても、かまわないとでもいうのか。おそらくは、自分だけは例外というわけなのだろう。英訳でもしてみれば、論理構造の破綻にすぐ気づく。まさに、日

本語で書かれ、日本語圏という特殊なマーケットで消費されることでしか成立しえない、ロクでもない議論であつたように今でも思っている。

「個性」が社会全体の調和と相容れないというのはとりわけ粗雑な議論で、科学的に見ても間違っている。「個性」は、他者とのコミュニケーションがあつてこそ、はじめて磨かれるものだからである。個性が輝いている人は、同時に他者との関係性を大切にし、社会にも

貢献する人である可能性が高い。逆に、顔のない、没個性の人のほうが、よほど社会から孤立し、調和を乱す可能性が高い。社会の調和の

ためにも、一人ひとりが個性を磨くのがよいのである。日本は個性よりも全体の調和をはかる社会だからなどと、呪文のようなことを言っているも仕方がない。

そもそも、人格というものは他者との関係性なしでは成立しない。

他者との濃密なやりとりの中に徐々に形成されていくのが私たちの人格である。河原の石ころが流されていく間に他の石とぶつかってしだいに形を変えていくように、私たち人間もまた、他者との行き交いの中に、しだいに人格をととのえていく。その中で、しだいに一人ひとりの個性が立ち上がってくる。モーツァルトが誕生

し、小林秀雄が生まれてくる。狼に育てられた少女の実話を見ればわかるように、他者との関係なしに人間らしい個性を際立たせることはできないのである。

インターネットに象徴される情報化社会の高度化で、「個性」の価値はかつてなく高まっている。個性のない、均一社会の調和しか考えない人間だけが集まった国をつくっても、国際競争に勝てない時代がすでに到来している。「ビートルズ」という強烈な個性を持った

ロック・バンドが登場したことによつて、英国がどれだけの恩恵を得たか。マイクロソフトのビル・ゲイツや、アップル・コンピュータのステイヴ・ジョブズのような個人的な創業者が出現していなかったら、アメリカの経済はどうなっていたか。戦後民主主義の中で個性が行きすぎたなどとする言説は、科学的な記述としてだけでなく、实体经济におけるパフォーマティブの文脈の中でも間違っている。

個性は、他人とのやりとりの中で磨かれる。日本の中に、個性を磨くために必要なコミュニケーションが不足しているわけではあるまい。むしろ、濃厚すぎるくらいだろう。問題なのは、コミュニケーションの内実である。コミュニケーションにおける力学の働き方に

よつては、個性を大切にするアメリカのような国も、没個性をよしとする風潮が見られぬでもなかった一時期の日本のような国もできあがる。力学をどう設計するかが、コミュニケーションの作用を決するのである。

（茂木健一郎『思考の補助線』による）



普通に日本的性格、従つて日本文化の特色として挙げられることは、日本人の同化力に基づいて外来文化を受容し集大成して文化が複質性または重層性を示してゐるといふのである。なるほどそれも一つの特色として挙げられるかも知れない。しかしこの国の文化をとつて見ても外来文化の影響を受けてゐないところはなく、そしてまた大抵の場合にはそれを同化して独自の文化を發展させそして複質的または重層的な文化を形成してゐるのである。また仮にそれが日本文化の特色であるとしてもそれは単に形式的な原理であつて、日本文化の内容そのものを具体的に捉へてゐるものではない。それならば何がいつた日本性格であるか。何がいつた日本文化の内容上の特色であるか。日本的性格又は日本文化にはどういふ諸契機が見られるか。それをはずり捉へることは甚だ困難なことであるが、一つの試みを提出するのにも必ずしも無意義ではなからうと思ふ。大体に於いて日本的性格、従つて日本文化に三つの主要な契機が見られるやうに私は思ふ。自然、意気、諦念の三つである。

その三つは互ひにどういふ關係に立つてゐるか。先づ外面的には自然、意気、諦念の三つは神、儒、仏の三教にほぼ該当してゐると云ふやうにも見ることが出来る。従つて発生的見地からは神道の自然主義が質料となつて儒教的な理想主義と仏教的な非現実主義とに形相化されたと云ふやうにも考へられる。さうしてそこに神儒仏三教の融合を基礎として国民精神が涵養され日本文化の特色を發揮したと見られるのである。

今、質料とか形相とか云つたが、この二つを内面的關連に於いて見ることが必要である。形相といふものは外部から質料に加へられるといふ様なものではない。質料の中にもともと形相が潜んでゐてそれがおのづから發展し自己創造して行くと共に自己に適合したものを外部から摂取するのである。理想主義のあらはれの意気といふことと、非現実主義のあらはれの諦念といふことは外来的な文化によつてはじめて新たに付け加へられた性質ではなく、既に神道の自然主義の中に萌芽として含まれてゐたものが次第次第に明瞭にあらはれて来て、それと同時に外来的ではあるが自己に適合した要

素として儒教や仏教の契機をも摂取し同化したのであると考ふべきである。

(中略)

以上に於いて、自然といふ質料の中に意気とか諦念とかいふ形相が内的におのづから含まれてゐてそれが次第にあらはに大きく成長して来る可能性が見られたと思ふ。自然主義からおのづから理想主義や非現実主義が發展して来るのである。理想主義や非現実主義を外来的のものとして大和民族の本来性と相容れないやうに考へる機械的歴史觀に賛意を表するわけには私はゆかぬ。然るになほここに問題が残されてゐる。それは意気と諦念とは果たして相容れるものであらうかといふことである。意気とは武士道に於いて見られる自力精進の精神である。諦念は他力本願の宗教の本質をなしてゐる。この両者は果たして相容れるであらうか。一体、氣節のために動く意気は動の方面である。物に動じない諦念は静の方面である。そして動の中に静があり、静の中に動があるといふ可能性が見られる限り意気と諦念との結合の可能性も目撃されなければならぬ。武士道でも命に安んずるといふことを云ふ。武士道が死を顧みないといふ裏面には死をあつさり諦めてゐるといふ知見が窺はれる。一般に死への存在といふやうなものは諦念を基礎に有つた意気といふ形で明瞭にあらはれてゐる。死は生を殺すものではない。死が生を本當の意味で生かしてゐるのである。無力と超力とは唯一不二のものとなつてゐる。諦念は意気の中に見られる否定的契機として欠くことのできないものである。意気と諦念とは互ひに相容れないやうなものではなく、むしろ両者は相關的に成立するものである。

(九鬼周造「日本的性格について」(一九三七年)による)



読解問題 10月4週分

問1 読解マラソン集1番「文章を読む営みは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 外から取り入れる知識ではなく、自分の内部から湧き出るのが教養である。
B 読書は、漫画よりも多くの思考作業を必要とする。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「文章を読む営みは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 言語は、漫画に比べると、だれでもが使える表現方法である。
B 未来の書物は、必ずしも現代のような本の体裁を持たないだろう。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「文学作品や評論のようなものを」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A マニュアルを書くことは、小説を書くときよりも高度な頭の働きを必要とする。
B マニュアルを読みこなせない人には、学者や評論家が多い。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「文学作品や評論のようなものを」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 初期のころの税務署の手引きが読みにくかったのは、読み手の問題でもあった。
B わかりにくいマニュアルを書く人は、知識人とは言えない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「所詮は卵や雛の」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 私が小説家になったころ、私は当時の文学関係者たちに失望していた。
B 私が文学に志したのは、当時の閉塞した文学の状況を打破したかったからだ。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「所詮は卵や雛の」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 四十代後半に書こうと思っていた小説は、多くの人生経験を必要とするものだった。
B 四十代に書こうと思っていた小説が書けたのは、六十代になってからだった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「子供の頃、習字の練習は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 白い紙に黒い墨で書くときのもったいないという意識が上達のエネルギーになる。
B インターネットのもたらす総合知は、個々のパートを専門家が担っていることによって可能になっている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「子供の頃、習字の練習は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A インターネットで発する情報は、無数の人々の眼にさらされているという点で印刷物を出版するときと同じ緊張を伴っている。
B いつでも更新可能なインターネットには、何かを完成させるという美意識がない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 11月4週分

問1 読解マラソン集5番「個人主義的な功利主義傾向に」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 功利主義的な自分探しの過程で、他者は自分を実現するための道具的なものと見なされる。
B 「自分探し」は、自分のために道具となってくれる「他者探し」でもある。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「個人主義的な功利主義傾向に」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 個性重視の考え方が、個人主義的で功利主義的な「自分探し」を生んだ。
B アイデンティティの個人主義的獲得という発想は、近代社会だからこそ起きている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「自身の創造性や潜在能力を」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 近年の格差社会の原因は、若年層の所得格差が増大していることにある。
B 格差社会は近年になって急激に拡大したのではなく、近代社会が本来持っている傾向だった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「自身の創造性や潜在能力を」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 潜在能力を開花させることと経済的に成功を得ることは必ずしも一致しない。
B 人々がニートに対し強い関心を持つのは、ニート人口が増大している事実を危惧しているからだ。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「メリトクラシーを」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 論述重視の試験では、言語表現に関わる出身階層の文化が学校での成績に影響を及ぼす。
B 欧米の学校は、出身階層による文化の違いを教育によって埋めるという役割を果たしている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「メリトクラシーを」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本の場合、学校で測られる学力は、家庭の文化的環境の差異に対して中立的である。
B 日本においては、子どもの育成環境と成績との間の関係を小さくするための努力がなされている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「『徳川家康自身は』というのは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 戦国時代まで野蛮だった武士は、江戸時代の漢文ブームによって、華夷思想を持てるようになるまで向上した。
B 朝鮮通信使は、政治では対立しても、文化では友好をつらぬくという態度で日本に接した。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「『徳川家康自身は』というのは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 朝鮮通信使は、日本における漢文ブームに驚きの目を見張り、日本固有の文化を高く評価するようになった。
B 日本の近代化が早かったのは、下級武士が漢文を通して近代文明を吸収したことが最大の要因である。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 12月4週分

- 問1 読解マラソン集9番「文化が単なる習慣と」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ピアノや楽譜という文明が広がるためには、ピアノを弾くという文化が広まる必要があった。
B 近代工業は、文化としても世界中に普及した。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問2 読解マラソン集9番「文化が単なる習慣と」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ピアノの文明が十分に広がっていない場所からでも、ピアノを弾くという文化を身につけた人は生まれる。
B 茶の湯の動作は、手順が見えるようになるまで繰り返し練習する必要がある。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問3 読解マラソン集10番「民主的人間は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A デモクラシーの社会では、自分も他人も人類という同じ集合体に属している。
B アリстокラシーの社会では、人間は自分の所属する身分と一体化している。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問4 読解マラソン集10番「民主的人間は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A アリстокラシーの社会では、人は自分の所属する不平等の身分から抜け出したいと思っている。
B デモクラシーの社会で個性が価値となるのは、社会の前提として平等の原則があるからである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問5 読解マラソン集11番「日本の論壇で」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 個性と全体の調和が相容れないという議論は、論理的に破綻している。
B 個性の行き過ぎを論議する人において、戦後民主主義の戦後は否定的にとらえられている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問6 読解マラソン集11番「日本の論壇で」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本の社会は、個性よりも全体の調和を大事にする社会である。
B 日本では、人と人とのコミュニケーションが不足しているために個性がなかなか磨けない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問7 読解マラソン集12番「普通に日本的性格」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本的性格の主要なものは、自然・意気・諦念であり、それらはそれぞれ神道・儒教・仏教にほぼ対応している。
B 質料と形相とは、個々に独立したものであり、関連性はない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問8 読解マラソン集12番「普通に日本的性格」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 神道の持つ自然主義に、あとから外来の儒教の理想主義と仏教の非現実主義が付け加えられた。
B 武士道における自力精神と仏教における他力本願とは結びついている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

10～12月

小1 コード： nane パ ス： PDF	小2 コード： nane パ ス： PDF	小3 コード： nane パ ス： PDF
小4 コード： nane パ ス： PDF	小5 コード： nane パ ス： PDF	小6 コード： nane パ ス： PDF
中1 コード： nane パ ス： PDF	中2 コード： nane パ ス： PDF	中3 コード： nane パ ス： PDF
高1 コード： nane パ ス： PDF	高2 コード： nane パ ス： PDF	高3 コード： nane パ ス： PDF